



非宗教的な世における信仰と働き

管理ビショップリック第二顧問 キース・B・マクマリンビショップ

ヤングアダルト対象のCESファイヤサイド • 2006年11月5日 • プリガム・ヤング大学

愛する兄弟姉妹の皆さん、何という光景でしょう。皆さんは様々な人生を歩み、様々な国から集まっています。今晚、皆さんが世界のあらゆる地域から集まっていることを考えると胸がいっぱいになります。この放送と再放送の間に、教会のすべてのヤングアダルトが集まり、このような行事に参加することは、実に驚嘆すべきことです。

先月の総大会で、輝かしい出来事が起こりました。世のほとんどの人は気づきませんでした。真理を知り、真理を愛する人々にとって、それは雷鳴のとどろきように忘れられない出来事でした。

最後の部会を思い返してください。タバナクルが次の賛美歌を歌い始めたときです。

感謝を神に捧げん 予言者の導き
末日に、福音を 光とたまいぬ
豊かなみ恵みに われらは感謝せん
喜び仕えつつ 戒め守らん

突然、男性も女性も、少年少女も、カンファレンスセンターで視聴している人が、皆立ち上がりました。み恵みに対する敬虔と感謝の念を抱いて立ち上がったのです。わたしたちは、イエスキリストの福音が回復され、父なる神と御子が天から語りかけられたこと、ジョセフ・スミスが預言者であり、ゴードン・B・ヒンクレー大管長が今日の主の預言者であることを認め、感謝の念に満たされました。

実に霊的な経験でした。神の王国の民が聖霊に導かれて信仰のために立ち上がったのです。

その日の午前、大管長は自身の高齢とそれに伴う健康上の問題について優しく、感謝を込めて話しました。常に忠実さの模範である大管長は、生涯を主の目的にささげることを改めて宣言し、こう語りました。

「主はわたしが生き長らえるのをお許しになりました。どれ

くらい生きられるかは分かりません。しかし、どれくらいであっても、わたしは最善を尽くして任務を果たし続けます。……

……主がお望みになるかぎり、わたしたちは前進して行きます……。

しかし、もし後継者の時が来るなら、引き継ぎは円滑に、この教会の頭である主の御心のままに進められるでしょう。ですから、わたしたちは信仰をもって進みます。その信仰について、今朝皆さんにお話しします。」²

時宜にかなった靈感によるメッセージでした。人生の真の意味や、天の御父の子供たちがあらゆる障害を克服するにはどうしたらいいかを思い出させてくれました。世俗的なものや不信仰、罪にまみれた世に対する言葉です。

非宗教主義

宗教教育ではない通常の教育は、世界を改善するのに役立ちますが、教育は、徳や道徳的責任、霊的な真理や信仰が存在するところで最も美しく開花します。

今日では、非宗教的な社会がもてはやされています。人も国も、非宗教的であることをこぞって自慢し、「この世的なもの、神にかかわることや霊的なこと、神聖ではないもの」³を重要視しているのです。

世のほとんどの人が、非宗教的立場こそ、均衡の取れた公正かつ秩序正しい政府に不可欠だと考えます。そのため、公の場では宗教的な発言を控えるよう指導され、市民の権利は法廷や法律で保護され、男性も女性も安易に法的手段に訴えて問題解決を図ろうとします。さらに宗教色のない社会では、永遠の命という概念を見過ごしにして、すべてを自然界の法則にのっとって理解しようとするため、信仰を持たずに物事を行うようになってしまいます。

この非宗教的な世にあって信仰深くあるには、絶えず注意し

多大な努力を払わなければなりません。人は世俗的な事柄に取り囲まれると、初めは堪え忍び、次いで哀れみ、そして受け入れます。⁴ 非宗教主義は今日そのような結果を人々にもたらしています。

あるがままの世の中では、救い主キリストに対する信仰に照らし合わせて考えることがないため、人は「高慢で、利己的な思いにとらわれ、過度の競争を好み、変化を嫌い、やみくもに自主独立を目指し、野望や本能的欲望に駆られ、世の賞賛を求めます。……往々にして、生まれながらの人は、自分のともした火の光の中を歩む、贖われていない存在なのです。……[2ニーフアイ7:10-11]そのような人は、周囲の状況に自分を合わせ、基準や行動を墮落した世に合わせます。……」⁵ 聖文にはこうあります。「この世的な状態にあるすべての人は、……この世で神なしに生きている人々で……ある。」(アルマ41:11)

非宗教主義は、物事を永遠の見地から見ることを不可能にするため、やがては人を不信仰へと陥れます。ミュンヘン大学の神学教授、ヴォルフハート・バネンベルグはこう語っています。

「公共の場で宗教色が薄らいでくると、キリスト教徒が持つ真理への確信が揺らいでいきます。……

宗教色のない場所では、キリスト教の初歩的な概念すら……あやふやになります。もはや、教えを否定するといった問題ではありません。多くの人々が、キリスト教の教えについておぼろげな知識すら持ち合わせていないのです。……キリスト教を知らない人が増えるにつれて、キリスト教に対する偏見も大きくなります。……

真理の概念自体が文化によって異なるとする理論もあり、事態はあっという間に困難になります。……多くの人にとって、……キリスト教の教義は単なる主張であり、個人の好みや必要に応じて受け入れることも否定することもできる代物となります。……

宗教色を排除した社会の中では、人は自分の存在には意味がないと感じるようになります。⁶

キリストへの信仰が人への信奉に変わります。人はどこから来てどこへ行くのか、この世の生活を治めるものは何なのか、といった疑問は公の場や個人の考えから追いやられてしまうばかりか、考える価値のないことと見なされます。このような不信仰は悲劇的な状況をもたらしています。

天の御父はこうなることを御存じでした。そのために福音が回復され、イエス・キリストを創造主、救い主、贖い主とする信仰

に再び火がともされました。人生の目的についても正しい理解の窓が再び開かれました。1831年、天の御父は子供たちにこう語られました。

「主なるわたしは、地に住む者に下る災いを知っているのです、わたしの僕ジョセフ・スミス・ジュニアを訪れ、彼に天から語り、戒めを与えた。……

信仰もまた地に増すため[である]。』(教義と聖約1:17, 21)

この世の基が据えられる前、すなわち宇宙に場所が設けられる前から、男性も女性も生き、動き、存在していました(使徒17:28参照)。人生には生物学的意味しかないとするこの世の考えは、基本的な真理を否定しています。それは、すべての人が心の奥底で感じ取っている、「人もまた初めに神とともにいた。」という真理です(教義と聖約93:29, 強調付加)。これは普遍の確かな真理です。

わたしたちの始祖であるアダムとエバがエデンの園に置かれて以来、人はこの世での経験とキリストの贖いを通して、完全な者となり、十分に成長し、完成された者となることができます。族長の時代が過ぎ、救い主が降誕し比類ない贖いの業をなされた時の中間を経て、「万物更新の時」が1820年に始まりました(使徒3:21)。こうして男性も女性も、少年少女も、再び自分の人生や環境を「主イエス・キリストを信じる信仰」に基づいて築けるようになったのです(信仰箇条1:4)。

若い友人の皆さん、皆さんはこれら地上の出来事が合流する地点にいます。「これまでは序章であり、未来が皆さんを待っているのです。」⁷ これから起こり得ること、起こらなければならないことは、皆さんが信仰と努力によって不信仰の風潮に歯止めを刺すことです。これは皆さんが人生で果たす役割であり、神聖な義務です。

信仰の指標

主はおっしゃいました。「もし、からし種一粒ほどの信仰があるなら、……あなたがたにできない事は、何もないであろう。」(マタイ17:20)ヒンクレー大管長はこう語っています。

「結局のところ、教会の真の財産は教会員の信仰にあります。」⁸

「この偉大な大義を推し進めるに当たり、最も必要としているのは、さらなる信仰です。信仰がなければ、御業は止まります。信仰があれば、だれも止めることはできません。」⁹

このような信仰は、単なる心構えや心情、知識や感情として持っている証ではありません。真の信仰、愛する預言者が語った信仰とは、この世に義を打ち立て、来るべき世で救いを得ることです。この信仰は、生けるまことの神と、神が遣わされたイエス・キリストが中核となっています(ヨハネ17:3参照)。信仰は真理に基を置き、知識に先立ち、行いによって完全になります。信仰は人に理解力を与え、天の御父の子供としてふさわしい行いをするための動機となります。この「信仰は、わたしたちが権能と支配力と権威を行使[できるようになるための]偉大な第一の原則であり、」¹⁰ わたしたちの考え方や行動、どのような人間になるかを決定します。

使徒ヤコブは、このような信仰の基本原則を教えています。

「ある人が自分には信仰があると称していても、もし行いがなかったら、なんの役に立つか。

……『行いのない信仰を見せてあげよう』と言う者があるろう。しかし、わたしは言う。『行いのないあなたの信仰なるものを見せてほしい。そうしたら、わたしの行いによって信仰を見せてあげよう』……

信仰も、行いを伴わなければ、それだけでは死んだものである。……

信仰が行いととも働き、その行いによって信仰が全うされるのではないか。」(ジョセフ・スミス訳ヤコブの手紙:2:14-15, 17, 21, 英文から和訳)

わたしたちは「指標」についてよく聞きます。「指標」とは、「同種のものの精度や能力を測ったり判断したりするための基準」¹¹です。

イエス・キリストを信じる自分の信仰が行いによって「全うされて」いるかどうかを知るのに役立つ指標が4つあります。その指標とは、(1)わたしたちの選択 (2)わたしたちが示す献身的な働き (3)わたしたちの従順な行い、そして (4)わたしたちが行う奉仕です。それぞれについて説明しましょう。

わたしたちの選択

第1に、選択という指標です。 末日聖徒は、「正直、真実、純潔、徳高くあるべきこと……を信じ[ます]。どのようなことでも、徳高いこと、好ましいこと、あるいは誉れあることや賞賛に値することがあれば、わたしたちはこれらのものを尋ね求めるもの

[です]。)(信仰箇条1:13, 強調付加)

ビルというある若い長老のことを考えてみましょう。ビルはこれを初等協会で学びました。それが正しいと当時も今も信じています。しかし、少し前から、ビルはポルノグラフィーに侵されています。その誘惑は強く、しかも中毒性があることが分かりました。この低俗なものに出くわす度に、ビルは悩み、恥じ、自尊心が崩れていくのを感じています。

ビルは2, 3週間前に総大会に出席し、神権部会でヒンクレー大管長が次のように話すのを聞きました。

「今夜集った皆さんの中で、大人でも子供でも、生活を改善することのできない人は、一人としていません。皆、改善する必要があります。なんとと言っても、わたしたちは神の神権を持っているのですから。……

この神権には、ふさわしさという大きな義務が伴います。汚れた思いに身を任せてはなりません。ポルノグラフィーにかかわってはなりません。どんな形であれ、虐待の罪を決して犯してはなりません。そのようなものを捨て去らねばなりません。『立ち上がれ、神に仕える男たちよ。』これらのものを捨て去ってください。そうすれば、神は皆さんを導き、支えてくださるでしょう。』¹²

ビルは決心しました。「今こそ、自分の信仰のために立ち上がる時だ。」

ビルはだれもいない場所に行き、汚らわしい写真や俗悪なビデオ、書籍を処分しました。本棚から汚らわしい音楽や卑猥な歌詞の音楽を撤去しました。コンピューターからポルノサイトにつながるものをすべて削除し、保護フィルターを入れました。さらに、コンピューターを人の出入りの多い場所に置いて、同じ罪をまた犯すことがないようにしました。

ビルは、自分が罪を犯したことを神の御前で認め、悔い改めてこの悪を生活から締め出すことができるよう熱烈に祈りました。ビショップや親しい人たちに助けを求めました。窮地の中で、「息子よ、あなたは正しい道にいます」という静かな確認の言葉が聞こえたようにビルは感じました。行動に移したおかげで、ビルの信仰は認められ、強められたのです。

やるべきことはまだ山ほどあります。断食と祈り、聖文研究、多くの涙も流すでしょう。善良なビショップが助けを与えてくれます。両親や親しい人たちの祈りはこたえられ、必要な助けが与えられるでしょう。**指標にあるとおり、ビルは悔い改めに至る**

信仰を行動で示し始めている——つまり、正しい選択をしているのです。

わたしたちが示す献身的な働き

第2に、献身という指標です。末日聖徒は、「神がこれまでに啓示されたすべてのこと、神が今啓示されるすべてのことを信じ[ます]。またわたしたちは、神がこの後も、神の王国に関する多くの偉大で重要なことを啓示されると信じ[ます]。

わたしたちは、イスラエルの文字どおりの集合と十部族の回復とを信じ[ます]。また、シオン(新エルサレム)がアメリカ大陸に築かれること(信仰箇条1:9-10)、[そして、男性も女性も]預言によって、[また、神から与えられた権威によって]神から召されなければならないことを信じ[ます]。(信仰箇条1:5)

真の献身は、この世の基が据えられる前に始まった主の御業と結びついています。義にかなった先祖たちはその御業に参加し、天の御父の目的が果たされるために人生をささげました。その献身的な働きの上にさらに築いていくことが、わたしたちの責任です。

ここで一つの話を紹介しましょう。すでに知っている人もいるかもしれません。

1856年、ロバート・パーカーと妻のアンは、4人の子供を連れて、ユタの聖徒たちと合流するためにイギリスを出航しました。彼らは預言者の言葉に従い、シオンの建設を助けるためにグレートベースンに集合したのです。パーカー家族はマッカーサー手車隊の一員として、一人一人が仕事を任されました。父親と母親が重い手車を引き、12歳のマキシは車を押し、10歳のマーサは6歳になる小さなアーサーの面倒を見ました。よちよち歩きの赤ん坊だった1歳のエイダは、抱えられて手車に乗りました。

ネブラスカを進んでいたとき、幼いアーサーは、休憩するために座っていると、眠ってしまいました。すると突然嵐が吹き荒れ、隊員たちは急いで野営しました。アーサーが子供たちの中にいないことに皆が気づいたのはそのときでした。

数日探しましたが、見つかりませんでした。手車隊は進まなければなりません。ロバートと妻のアンにとって、信仰をもって行動しなければならない時でした。アーチャー・ウォルターズは、1856年7月2日の日記にこう記しています。「パーカー兄弟の幼い男の子は……行方不明になった。父親はその子を見つけるた

めに引き返した。」

出発する際、アンは真っ赤なショールを夫の肩に掛けるとこう言いました。「あの子が死んでいたら、このショールで包んで埋葬してください。でも生きて見つかったなら、これを旗にして知らせてください。」アンはほかの子供たちとともに手車を引いて進んで行きました。

ロバートは進んで来た森の中の道を何マイルも引き返し、幼い息子の名を呼び、探し、祈りました。そして中継所にたどり着き、ついに息子がきこりの夫婦に保護されていることを知ったのです。幼いアーサーは病気になっていましたが、神は愛に満ちた両親の祈りを聞き届けてくださったのです。

一日の旅が終わると毎晩、アンは子供たちと一緒に目を凝らしました。3日目の晩、夕日の中に真っ赤なショールがはためくのが見えると、この勇敢な母親は砂山の中に崩れ落ちました。疲れ果てていたのです。アンは、実に6昼夜も眠ることができないでいたのです。¹³ 神は確かに優しく慈しみ深い御方です。献身的な働きは報われ、信仰は全うされました。そして心からの喜びをもって聖徒たちは歌いました。『すべてはよし……』と。¹⁴

当時赤ん坊だったエイダは、成長してわたしの祖父、ブリガム・ヤング・マクマリンと結婚しました。祖母は、自分たちがダニエル・D・マッカーサー手車隊と平原を渡って来たことを決して忘れてはならないと子供たちに教えました。赤いショールの話は、個人的なものとなり、その信仰は、わたしたちにも受け継がれました。そして、わたしたちは進み続けます。¹⁵ 大きな障害は朝日に露が消えるように影をひそめていくでしょう。

この初期の聖徒たちにも指標を見ることができます。彼らの行いは信仰の表れであり、献身的な働きは子孫にとって人生の規範となりました。

わたしたちの従順な行い

第3に、従順という指標です。末日聖徒は、「……キリストの贖罪により、全人類は福音の律法と儀式に従うことによって救われうると信じ[ます]。(信仰箇条1:3, 強調付加)

ここで、若い夫婦について想像してみましょう。この世に生きる夫婦を代表しています。デビッドとミッシェルは、知り合う前からこの信仰箇条の言葉を知っていました。しかし、この放送を視聴する多くの人が持っているのと同じ悩みを抱えていました。

二人の年齢は20代半ばから20代後半くらいです。知り合ってからしばらくして、付き合うようになり、愛し合っています。しかし、結婚して子供を持つという決断に踏み切ることができません。学業を終え、お金を貯め、個人的な望みを達成するまで結婚を先延ばしした方がいいのでしょうか。

また、この二人には、離婚件数の増加や世界中で起こっている戦争や暴動、人口過剰が気になっていました。結婚したとしても、果たして続くだろうか。こんな世に子供を産んでもいいのだろうか。

デビッドとミッシェル、信仰を行動で示してください。次の言葉を忘れてはなりません。「男女の間の結婚は神によって定められたものである」、……」¹⁶「神があわせられたものを、人は離してはならない。」(マタイ19:6;教義と聖約132:19-20も参照)「子供たちは神から賜った嗣業である」(詩篇127:3)「地は満ちており、十分にあり余っている。」(教義と聖約104:17)

知っていることに従って行動してください。そうすれば、正しい行いは、信仰を完全なものにするでしょう。人生は豊かですばらしいものになります。両親の良い模範に倣ってください。結婚できる条件はそろってなくても、両親は結婚しました。彼らも戦争や暴動のことを心配したと思いますが、それでも信仰を行動で示してあなたを産んだのです。結婚生活や子育ての負担は学業の妨げにはならず、むしろ人生を豊かなものにしてくれました。個人的な望みについては、幸せな形でうまく達成されていると感じることができています。自分たちも含め、皆が幸福に暮らしているからです。

両親にとって人生は簡単ではありませんでした。儉約してお金を貯め、わずかなお金でやりくりしなければなりません。彼らとて、答えの分からない問題や状況に直面しましたが、「前進なさい」ということが、全能の神が定められた方法だということを知っていました。あなたが今これほど「豊か」なのは、両親の信仰のおかげなのです。

両親から繰り返し聞かされた話から、いろいろな意味ですべてが大変だったことをあなたは知っています。しかし、行いによって両親の信仰は全うされたのです。

もちろん、両親は年老いています。動きは緩慢で、物腰は穏やかですし、外見にも、広告がはやし立てるような格好の良さはありません。しかし、彼らが神と互いを愛していることは、敬虔さと互いに対する敬意に表れています。人生での苦労から彼らは知恵を得、忍耐と感謝することを学びました。小さいけれ

ども大切な方法で、「望んでいる事柄を確信し、まだ見ていない事実を確認」したのです(ヘブル11:1)。若いころには結果を見ることができなくとも従いました。信仰を行動で示し、神殿で結び固めの儀式を受け、子供をもうけました。その結果、今では真の幸せとは何かを知っています。**指標はこうです。従順は天の祝福をもたらす——両親に注がれたように、あなたにも同じ祝福が注がれるはず**です。

わたしたちが行う奉仕

第4に、奉仕という指標です。末日聖徒は、「永遠の父なる神と、その御子イエス・キリストと、聖霊とを信じ[ます]。

……わたしたちは、……キリストが自ら地球を統治されること、そして地球は更新されて楽園の栄光を受けることを信じ[ます]。)(信仰箇条1:1, 10)

わたしたちは神会について、世の人々が思いも及ばないような知識を持っています。その知識は真実です。さらに、わたしたちは神が地球とそこに生きる生物を造られた目的を知っています。その知識と、主の業を行うという神聖な義務を与えられているわたしたちは、自分が教会員であることを軽々しく考えてはいけません。

宗教じみて見られることを恐れ、教会にあまり深くかかわらないようにしようとしている人もいます。「教会を神の王国ではなく、一組織だと」¹⁷ 見なしているのです。「気高い生得権を持つ若者」¹⁸ の皆さん、教会と主の王国における業を生活の中心に据えてください。召しを受けたら、それを引き受け、最善を尽くしてください。次の主の勧告に耳を傾けましょう。「だから、この世のものを求めないで、まず、神の王国を築き、神の義を打ち立てることを求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて添えて与えられるであろう。」(ジョセフ・スミス訳マタイ6:38)

4日後の11月9日は、不幸に見舞われたワイリー手車隊の開拓者たちのソートレク盆地到着150年を記念する日です。彼らは大変な苦難の末、犠牲者を出しながらも盆地にたどり着きました。嵐や衰弱のため多くの人が命を落としましたが、救助隊のおかげで救われた人の数は犠牲者の数を上回りました。

リーバイ・サベージは、その日到着した人の一人です。歴史記録によると、忠実なサベージは、聖徒たちを救い、皆が盆地に到着できるよう精力的に働きました。しかし、その気高い奉仕の業は、雪に覆われたワイオミングの平原に始まったわけでは

ありません。恐らくこれは、彼の献身的な奉仕の人生の中で脚光を浴びる部分ではありますが、また別の話なのです。

リーバイは、1846年6月に26歳でバプテスマを受けました。彼は西部に移動するようにとの預言者の呼びかけにこたえ、こう記録しています。「……見知らぬ土地へ向けた長い旅のために、できる限りの準備をした。異国の地への旅である。……わたしたちは、慣れ親しんだ土地に別れを告げ、……西へと向かった。目的地も知らず。ロッキー山脈の西にある未開地のどこかに移住することくらいしか予測できなかったのである。」¹⁹

1846年7月16日、リーバイは勇敢な男性たちとともに、預言者からのもう一つの呼びかけにこたえてモルモン大隊に登録し、約3,200キロメートルの道のりを行進しました。アイオワ州カウンスルブラフスから、カリフォルニア州サンディエゴを経てロサンゼルスにまで進軍すると、そこで政府からの任を解かれました。除隊となった者たちは家族がどこにいるのか分からないまま、グレートソルトトレイク盆地を目指して旅立ちました。リーバイ・サベージが取ったルートはさらに2,100キロメートル進む行程で、道のりは険しく、危険の多い土地でしたが、どうにかソルトトレイク盆地にたどり着くことができました。

その地でリーバイは土地を切り開き、クリケット(訳注——コロギに似た大型の昆虫。「モルモンクリケット」とも呼ばれる)と闘い、結婚して息子をもうけましたが、数か月後に妻を亡くしました。妻の死から10か月後、1852年10月の大会で、リーバイはほかの忠実な兄弟たちとともにサイアム(現在のタイ)に伝道に行くよう預言者から召されます。

召された者たちは隊を組んで旅し、幌馬車でカリフォルニアの海岸に出ると、そこから太平洋に船出しました。サンフランシスコからカルカット経由でサイアムに向かったのです。1853年1月29日付のリーバイの日記から、この初期の宣教師たちの心情を垣間見ることができます。こう書かれています。

「わたしたちが乗り込んだ頑丈な船は、穏やかな風の力を受けて進み、目的地に向かってうなりを上げながら進んで行った。生まれ育った愛する土地を後にして……皆が思いに浸れる場所を探し、そこで家庭のぬくもりを思い、愛する妻や子供、友人たちのことを考えた。……しかし今、わたしたちは故郷から遠く離れた所にいる。一体何のために。山のような金銀を手に入れるためか、それともこの世の名誉を得、ぜいたくの限りを尽くせるようになるためか。いや、違う。絶対に違う。主の召しに従って、暗い闇に取り残され、誤った教えに惑わされている国の

民に真理と……救いのメッセージを伝えるためなのだ。間もなく、休むために皆それぞれのベッドに戻った。しかし、皆の心は愛する人々との過去の思い出や、これから始まる伝道に寄せられていた。」²⁰

伝道を終えると、リーバイはマサチューセッツ州ボストン経由の船で故郷に向かい、生まれ故郷のオハイオ州グリーンフィールドを訪れました。そこでは、「わたしは地球を一周した」²¹と記しています。リーバイはアイオワシティーでウィリー手車隊に加わり、そこで自分や家族、ひいては教会全体に大きな影響を永遠に残すことになる物語が始まったのです。その旅で見た彼の行いは、犠牲と奉仕の人生を象徴しています。指標はこうです：**開拓者たちの信仰ある働きは、不信仰な世の人々に対する道標であり、彼らが行った奉仕は、わたしたちのだれもが従うべき模範なのです。**

フレデリック・W・フェイバー牧師の作による次の詩は、わたしたちの胸を打ちます：

いにしへの聖徒の
その篤き信仰
われらを導く
苦しみの時も

いにしへの聖徒の
その篤き信仰
われらも広めん
み国の福音

いにしへの聖徒の
その篤き信仰
われらも愛さん
友も敵をも

その聖き信仰
われらも従わん」²²

兄弟姉妹の皆さん、わたしは証します。神は天におられ、その名はエロヒムです。神はご自身のすべての子供たちを、彼らの現在の状況や住む場所にかかわらず御存じです。イスラエルの聖なる者であるイエスは、神の愛される御子であり、全人類の救い主です。少年だったジョセフ・スミスは、神とその聖なる御子の声によって預言者に召され、その召しを通して、まことの教会と神の王国が地上に回復されました。これらのことを知っているわたしたちは、何と祝福されているのでしょうか。愛する兄

弟姉妹、皆さんは歴史的な出来事の合流点にいます。皆さんは輝ける王国から来ました。真理に忠実であり、善き業を進めることは、皆さんに与えられた特権です。預言者の言葉を実践してください。過去の人々はそれを期待し、現代の人々は救われ、未来の人々はそれを頼りにします。そして、聖霊は皆さんの行いを導かれるでしょう。

イエス・キリストの御名により、アーメン。

注

1. 「感謝を神に捧げん」『賛美歌』11番
2. 『リアホナ』2006年11月号, 82, 強調付加
3. *Random House Webster's Unabridged Dictionary*, 第2版 (2001年), "secular,"の項, 1731
4. アレクサンダー・ポープ, *An Essay on Man*, 書簡2, 第220節
5. *Book of Mormon Reference Companion*, デニス・L・ラージー編 (2003年), 582
6. "How to Think about Secularism," *First Things*, 1996年6月-7月, 27, 30。www.firstthings.com/ftissues/ft9606/articles/pannenberg.html
7. ボイド・K・パッカー, 中央幹部訓練集会, 2006年10月。ウィリアム・シェイクスピア, *The Tempest*, W・J・クレイグ, オクスフォード・シェイクスピア (1924年), 第2幕, 第1場面, 第261節
8. 『聖徒の道』1991年7月号, 55参照
9. 『リアホナ』2006年11月号, 85
10. ジョセフ・スミス編, *Lectures of Faith* (1985年), 5, 8
11. *Random House Webster's Unabridged Dictionary*, "benchmark," 193
12. 『リアホナ』2006年11月号, 60
13. ボイド・K・パッカー, *Memorable Stories and Parables of Boyd K. Packer* (1997年), 4-6参照
14. 「恐れず来たれ, 聖徒」『賛美歌』17番
15. 「山のごとく強く」『賛美歌』167番
16. 「家族——世界への宣言」『聖徒の道』1995年11月号, 102
17. ニール・A・マックスウェル, 『聖徒の道』1993年1月号, 72
18. 「山のごとく強く」『賛美歌』167番参照
19. リーバイ・サベージ・ジュニアの日記, リン・M・ヒルトン編 (1966年), xii
20. リーバイ・サベージ・ジュニアの日記, 5, 強調付加
21. リーバイ・サベージ・ジュニアの日記, 59
22. 「いにしえの聖徒の」『賛美歌』42番